

孟子(名は軻、字は子輿、子車)は、中国戦国時代の中期(BC372年)魯の鄒の国(現在の山東省鄒県)の士階級の家に生まれる。孟母三遷などで知られる教育熱心な母の下で育った孟子は、孔子の孫、子思の門人に学業を学んだといわれます。孔子の儒家思想を継承発展させた孟子は、四十二、三歳頃から群雄割拠する戦国時代の諸国を遍歴し、仁義に基づく王道政治などを遊説してまわります。しかしながら、当時の富国強兵を標榜する戦国の世に、法よりは徳、組織よりは個人を問題とする孟子の思想は、一時的には斉において受け入れられたものの、あまりにも高い理想論、「迂遠にして事情にうつし」として敬遠され、諸侯の探るところとはなりません。このような孟子の教えが記されているのが『孟子』です。孟子は理想を実現できないまま約二十年の遊説をやめて故郷の鄒に戻りBC289年八十四歳で没したといわれます。

孟子の思想としてもっとも代表的なのが、「性善説」です。人間はもともと善い心を持っているはずである、が、ときに欲によって悪い行ないをしてしまう、だから、礼を身に付け教育を受けることによって、欲を抑えつけ、本来の善・仁の心を持ち備えるべきである、というような考え方です。ここでは、性善に基づく仁義の思想、仁義に基づく王道政治論を見ていくことにします。

■性善説

孟子の代表的な思想はよく知られているように「性善説」です。これは人間は本来善い心を持っているはずである、が、ときに欲によって悪い行ないをしてしまう。だから、礼を身に付け教育を受けることによって、欲を抑えつけ、本来の善・仁の心を持ち備えるべきであると主張します。

○四端(仁・義・礼・智の萌芽)の拡充しんせんちゆうじつ＝(公孫丑上)

孟子曰、「人皆有不忍人之心、先王有不忍人之心、斯有不忍人之政矣。以不忍人之心、行不忍人之政、治天下可運之掌上。」

○不忍人之心＝人の不幸を黙って見過ごせない同情心。○先王＝昔の聖王。○斯ち／斯に←条件と結果を結ぶ。「・・・であればこそである」。○運之＝廻る。まるく動く。●「可運之掌上」物を掌で転がすようにたやすく天下を治めることができる。

(大意)人は生来的に忍びざるの心をもっている。その心を政治の上に生かしていけば天下の治安は盤石なものとなる。

孟子曰はく、「人皆人に忍びざるの心有り、先王人に忍びざるの心有れば、斯ち人に忍びざるの政有り。人に忍びざるの心を以て人に忍びざるの政を行はば、天下を治むること、之を掌上に運らすべし。」

所以謂人皆有不忍人之心者、今、人乍見孺子將入於井、皆有怵惕惻隱之心。非所以內交於孺子之父母也。非所以要譽於鄉党朋友也。非惡其声而然也。

○乍たちまち＝忽たちまち＝俄にわかに。○孺子じゆし＝幼兒。○怵惕惻隱之心じゆてきそくいん＝他人のことも痛ましく感じる深い思いやりの心。

○交まじわり＝交際。○内いる＝入る。○要ちとめる＝求める。

(大意) 生来的に忍びざるの心が備わっている根拠は、例えばいま幼児が井戸に落ちかけるのを見た時、誰でも即座に助けようとする心が働く。幼児の親に付け入ろうとか世間の目を気にしてそのような行動をするわけではない。

人皆人に忍びざるの心有りと謂ふ所以の者は、今、人乍ち孺子の將に井に入らんとするを見れば、皆怵惕惻隱の心有り。交はりを孺子の父母に内るる所以に非ざるなり。譽を郷党朋友に要むる所以に非ざるなり。其の声を悪みて然するに非ざるなり。

由是觀之、無惻隱之心、非人也。無羞惡之心、非人也。無辭讓之心、非人也。無是非之心、非人也。惻隱之心、仁之端也、羞惡之心、義之端也。辭讓之心、礼之端也。是非之心、智之端也。人之有是四端也、猶其有四体也。

○端たん←萌芽。芽生え。○羞惡之心＝不善を恥じ不善を憎む心。○四体＝両手両足の四体。

(大意) 以上のことから惻隱・羞惡・辭讓・是非の心を持たない者は人ではないといえる。これらの心は仁・義・礼。智の萌芽で、人間が両手両足を備えているように誰にでも其の芽は有るものである。

是に由りて之を觀れば、惻隱の心無きは、人に非ざるなり。羞惡の心無きは、人に非ざるなり。辭讓の心無きは、人に非ざるなり。是非の心無きは、人に非ざるなり。惻隱の心は仁の端なり。羞惡の心は義の端なり。辭讓の心は、礼の端なり。是非の心は、智の端なり。人の是の四端有るや、猶ほ其の四体有るがごときなり。

有是四端而自謂不能者、自賊者也。謂其君不能者、賊其君者也。凡有四端於我者、知皆擴而充是矣。若火之始然、泉之始達、苟能充之、足以保四海、苟不充之、不足以事父母。

○賊そくなう＝損なう。●自賊者也←自分の素質や能力を駄目にしてしまう。○四端＝仁・義・礼・智の萌芽。○擴くわげ＝ひろげる。●知皆擴而充是矣←四端を推し拡げて充実させることを知っている。●若火之始然、泉之始達←

(四端を育てようとすれば) 火が燃え出し、滝が湧き出るように限りなく大きくなっていく。●四海←天下。

○保やすん＝安ん＝保やすん。

(大意) この仁義礼智の四つの芽を持ちながら自分はそれを実行できないという者は自分で自分を損なう者である。また仕えている君は仁義礼智を実行できないという者は、君を損なう者である。すべて自分の心に四端を自覚する者は、その芽を大きく育てていくことを知っている善である。それは火が燃え出し、泉が湧き出るように限りなく大きく心に拡がっていく。もしそのようになれば、天下は安定し磐石となってくるが、四端を大きく育てていかなければ、自分の両親に仕えることさえ十分にはできないものだ。

是の四端有りて而も自ら能はずと謂ふ者は、自ら賊ふ者なり。其の君能はずと謂ふ者は、其の君を賊ふ者なり。凡そ我に四端有る者は、皆拡めて之を充たすを知る。火の始めて燃え、泉の始めて達するがごとし。苟も能く之を充たさば、以て四海を保んに足り、苟くも之を充たさざれば、以て父母に事ふるに足らず。

○性善説―告子との論争

告子は戦国時代の思想家で、姓は「告」、名は「不害」または「勝」。生没年は不詳ですが、その後の研究で平和・博愛主義を説いた墨子の晩年から孟子の中年頃まで生存していたと考えられています。さて、人間の本性は善であると唱えた孟子の性善説に対して、告子は人の性には善も不善も無いとする「性無善無不善説」を唱え、流れる水を例えにとつて論陣を張ります。これに対して孟子はどのようなに反論するのか、この論争の一端を次に見ていきます。

告子曰「性猶湍水也。決諸東方則東流、決諸西方則西流。人性之無分於善不善也、猶水之無分於東西也。」孟子曰、「水信無分於東西、無分於上下乎。人性之善也、猶水之就下也。人無有不善、水無有不下。今夫水、搏而躍之、可使過額、激而行之、可在山。是豈水之性哉。其勢則然也。人之可使為不善、其性亦猶是也。」 (告子上) #

○湍水たんすい＝流れの急な水。渦巻く水。○信まことに＝確かに。○類たぐひ＝ひたい(額)。○行やる＝行つ。

(大意) 告子は次のように言う。「人間の本性に善・不善の区別がないのは渦巻く急な流れの水のようなものだ。堰を東に切れば東に流れ、西に切れば西に流れる。人間の本性に善と不善との区別がないのは、水に東と西の区別がないのと同じだ」と。これに対して孟子は「確かに水には東西の区別はない。しかし上下の区別ははっきりしている。人間の本性を善とするのは、水が高所から低所に向かって流れるのと同じだ。人の本性が善でない者は無いし、水が低所に向かって流れていかなないものはない(低きに向かって流れるのが水の本性だ)。今、水を手で打って跳ね上がらせると額を飛び越えさせることもできるし、流れをせき止め逆流させれば山の頂上まで登らせることもできる。しかしそれが水の本性であろうか、いやそうではない。外から加えた力がそうさせるのだ。人間に不善を行わせようとするのは、人間本来の善性が水の場合と同じように外からの力によって動かされるためなのだ。」

告子曰はく「性は猶ほ湍水のごときなり。諸れを東方に決すれば則ち東流し、諸れを西方に決すれば則ち西流す。人性の善不善を分つこと無きは、猶ほ水の東西を分かつこと無きがごときなり。」と。孟子曰はく、「水は信に東西を分かつこと無きも、上下を分かつこと無からんや。人性の善なるは、猶ほ水の下きに就くごときなり。人善ならざるに有る無く、水下らざるに有る無し。今夫れ水は、搏ちて之を躍らせば、類を過ぎさしむべく、激して之を行らば、山に在らしむべし。是れ豈に水の性ならんや。其の勢ひ則ち然るなり。人の不善を為さしむべきは、其の性も亦た猶ほ是くのごときなり。」と。

○良知と良能

孟子は、人間は経験や教育で得た後天的な知識の他に、生まれながらに備わっている先天的な道徳的判断能力（良知）と行為能力（良能）を持っているとしました。この良知・良能は四端の中核をなすもで、孟子の性善説はこの考えを根本に据えています。その論を見ていきます。

孟子曰、「人之所不学而能者、其良能也。所不慮而知者、其良知也。孩提之童、無不知愛其親也。及其長也、無不知敬其兄也。親親仁也。敬長義也。無他、達之天下也。」（尽心上）

○孩提之童＝二、三歳くらいの幼児。

（大意）孟子は言つ「人は経験や学習で学ばなくてもわきまえた行動をするが、これは人間が本来持っている良能による。深く考えなくても事の是非や善悪も自得しているが、これは人間が本来持っている良能による。二、三歳の幼児でも（自然と）自分の親を愛することを知らないものはいない。少し大きくなると自分の兄を敬うことを知らない者はいない。このように親を親しみ愛する心の働きが仁の行いだ。年長者を敬うのが義の行いである。（人間の行うべき道というのは）他でもない。この親を親愛し年長者を敬う心（良知良能）を広く天下にいきわたらせればよいのである。（そのようにすれば）乱れた世の秩序回復と平和安定を招来できる」と。

孟子曰はく、「人の学ばずして能くするところの者は、其の良能なり。慮らずして知る所の者は其の良知なり。孩提の童も其の親を愛するを知らざる無きなり。其の長するに及びてや、其の兄を敬するを知らざる無きなり。親を親しむは仁なり。長を敬するは義なり。他無し、之を天下に達するなり。」と。

○仁義

魏の恵王が秦や斉に奪われた土地を回復し国家再興を目指すべく、広く賢者を召し抱えようとしていることを伝え聞いた孟子は故郷の山東からはるばる魏にやってくる恵王と面談します。恵王は自国に

利益を与える方策を孟子に問いますが、孟子は目先の利の追求より仁義を広く浸透させることが一番重要なことだと応えます。そのあたりのやり取りを見ていきます。

孟子見梁惠王。王曰、「叟、不遠千里而來。亦將有以利吾國乎。」孟子對曰、「王何必曰利。亦有仁義而已矣。王曰何以利吾國、大夫曰何以利吾家、士庶人曰何以利吾身、上下交征利而國危矣。」

○叟そう＝老人の尊称。○大夫＝天子、諸侯の家来。身分は上から卿・大夫・士となる。○征せい＝利益をうばい取る。

（大意）孟子が魏の恵王に直面した。恵王は遠路はるばるやってきた孟子に吾國に利をもたらず策を持つてきてくれたのかと問うと、孟子は答えて言った。「どうして利益ばかりを問題にする必要がありますでしょうか。王は昔の聖賢と同じように仁義のことだけを考えればいいのです。王がどうしたら自國の利益になるかということばかりを言い、臣下の大夫がどうしたら自分の家の利益になるかということばかりを言い、士や庶民がどうしたら自分の利益になるかということばかりを言って、上の者も下の者も自分の利益を取ることばかりを追い求めたら、國家は危機に陥るでしょう。

孟子梁の恵王に見ゆ。王曰はく、「叟、千里を遠しとせずして來る。亦た將に以て吾國を利すること有らんとするか。」と。孟子對へて曰わく、「王何ぞ必ずしも利と曰はん。亦た仁義有るのみ。王は何を以て吾が國を利せんと曰い、大夫は何を以て吾が家を利せんと曰い、士庶人は何を以て吾が身を利せんと曰はば、上下交利を征りて國危ふし。」

万乘之國、弑其君者、必千乘之家。千乘之國、弑其君者、必百乘之家。万取千焉、千取百焉、不為不多矣。苟為後義而先利、不奪不廢。未有仁而遺其親者也。未有義而後其君也。王亦曰仁義而已矣。何必曰利。」

（梁惠王上）

○万乘之國＝「乘」は馬四頭立て戦車を数える単位で一乗につき兵百人が付いた。したがって、万乗の國は一萬の戦車を使うことのできる強大な大國ということになる。○弑しつする＝身分の下の方が上位の者を殺す。○廢あく＝満足する。

（大意）万乗の國でその主君を殺そうとする者があるとすれば、それは必ず千乗の家祿をもらっている大夫（家老）です。千乗の國でその主君を殺そうとする者があるとすれば、それは必ず百乗の家祿をもらっている大夫です。万の中から千の領地をもらい、千の中から百の領地をもらうというのは決して少ない俸祿ではありません。それにも拘らず、義を後回にして利を真つ先に考えるようになる。主君の領地をすべて奪い取ってしまうなと満足しないということになってしましましょう。仁の心を持つもので自分の親を棄てて顧みないような者は昔からおりません。義の心を持っていないが自分の主君をないがしろにした臣下は昔からおりません。（だから）王もまた仁義のことだけをお考えになればいいのです。どうして利益ということなぞ言ふ必要がありませんししょうや。」と。

万乗の国、其の君を弑する者は、必ず千乗の家なり。千乗の国、其の君を弑する者は、必ず百乗の家なり。万に千を取り、千に百を取るは、多からずと為さず。苟しくも義を後にして利を先にするを為さば、奪はずんば贖かず。未だ仁にして其の親を遺つる者有らざるなり。未だ義にして其の君を後にする者有らざるなり。王も亦た仁義と曰はんのみ。何ぞ必らずしも利と曰はん。」

■王道

孟子は、孔子の説く「徳のある統治者がその持ち前の徳をもって人民を治めるべきである」という徳治主義の考えを推し進め、「王道政治」を唱えました。王道政治とは、君主が仁義を重んじて民を治める政治の在り方で、君主が力づくで民を治めるのではなく、民に対して仁や義といった徳をもって政治を実践することが最も肝要で、そうすることで民は自然と従ってくるという考えです。富国強兵を背景とした武力による統治政治を「霸道」とよんで否定します。

○覇者と王者

孟子曰、「以力仮仁者覇。覇必有大国。以德行仁者王。王不待大。湯以七十里、文王以百里。以力服人者、非心服也。力不贍也。以德服人者、中心悦而誠服也。如七十子之服孔子也。詩云、『自西自東、自南自北、無思不服。』此之謂也。」（公孫丑上）

○仮りる＝借りる。かり受ける。○有つ＝備えている。○湯＝殷の初代王。○文王＝周の文王。○贍りる＝十分ある。○詩経＝中国最古の詩篇。儒教の経典である経書の一つ。

（大意）孟子は言う、「武力で威圧しながら仁者を装う者は覇者である。覇者は必ず大国を保つ必要がある。（一方）徳を以て仁を行う者は王者である。王者は国が大国となるのを待つ必要はない。（その証拠に）殷の湯王は七十里四方、周の文王は百里四方の小国に過ぎなかった。武力を以て人を帰服させる者は、人の心を服せしめることはできない。これは力が足りないためだからではない。徳を以て人を帰服させる者は、相手が心の芯から喜んで誠に服する。孔子の七十人の弟子たちが孔子に心服したようなものだ。詩経は（周の武王を）こう歌っている。『西からも東からも、南からも北からもやって来て、服しない者はいなかった。』と。これが王者というものだ。

孟子曰はく、「力を以て仁を仮る者は覇たり、覇は必ず大国を有つ。徳を以て仁を行ふ者は王たり。王は大を待たず。湯王は七十里を以てし、文王は百里を以てす。力を以て人を服する者は、心服せるに非ざるなり。力贍らざればなり。徳を以て人を服する者は、中心悦びて誠に服するなり。七十子の孔子に服するるときなり。詩に云う、『西よりし東よりし、南よりし北よりし、思いて服せざる無し。』とは此れを之れ謂ふなり。」と。

○五十歩百歩

梁惠王曰、「寡人之於国也、尽心焉耳矣。河内凶、則移其民於河東、移其粟於河内。河東凶、亦然。察隣国之政、無如寡人之用心者。隣国之民不加少、寡人之民不加多、何也。」

○河内・河東＝土地の名。○凶＝凶作。

(大意) 梁の恵王が言った。「私は国政について心を尽くしてやってきた。河内地方が凶作の時には住民を河東へ移住させ、(移住できない者のために) 河東の粟を河内に運ばせた。河東地方が凶作のときも同じようなことをしている。隣国の政治を注意深く観察しても、私ほど民のために心を配った政治をしているものはいない。(それなのに) 隣国の民が減るといこともなく、わが国の民が増すということもないのは、どういっわけであらうか。」と。

梁の恵王曰はく、「寡人の国に於けるや、心を尽くすのみ。河内凶なれば、則ち其の民を河東に移し、其の粟を河内に移す。河東凶なるも、亦た然り。隣国の政を察するに、寡人の心を持ちふるがごとき者無し。隣国の民少なきを加へず、寡人の民多きを加えざるは、何ぞや。」と。

孟子対曰、「王好戦。請以戦喻。填然鼓之、兵刃既接。棄甲曳兵而走。或百歩而後止、或五十歩而後止。以五十歩笑百歩、則何如。」曰、「不可。直不百歩耳。是亦走也。」曰、「王知如此、則無望民之多於隣国也。」

(梁恵王上)

○填然＝太鼓の音。○兵＝武器。

(大意) 孟子は恵王に答えて言った。「王様は戦争がお好きにみえるので、戦争に例えてお答えしましょう。太鼓を打ち鳴らし、両軍が激突し戦いが始まりました。甲冑を棄て武器を引きずって逃げ出すものがあります。或るものは百歩逃げて後止まり、或るものは五十歩逃げて後止まりました。五十歩逃げて止まったものが百歩逃げたものを(臆病者として) 笑ったとしたら如何なものでしょうか。」と。すると(恵王) は「それはおかしい。ただ百歩まで逃げなかつただけだ。逃げ走ったことには変わりがない。」と。そこで孟子は言った、「王様、この道理がお分かりになるならば、自国の民が隣国の民より多くなるのを望んではなりませんまい。」と。

孟子対へて曰はく、「王戦ひを好む。請ふ戦いを以て諭へん。填然として之を鼓し、兵刃既に接す。甲を棄て兵を曳きて走る。或いは百歩にして後止まり、或いは五十歩にして後止まる。五十歩を以て百歩を笑わば、則ち如何。」と。曰はく、「不可なり。直だ百歩ならざるのみ。是も亦走るなり。」と。曰はく、「王如し此れを知らば、則ち民の隣国より多きことを望むこと無かれ。」と。

○王道の始め

孟子曰、「不違農時穀不可勝食也。數罟不入洿池、魚鼈不可勝食也。斧斤以時入山林、材木不可勝用也。穀與魚鼈不可勝食、材木不可勝用、是使民養生喪死無憾也。養生喪死無憾王道之始也。」

○數罟こ＝目の細かい網。○洿池おち＝低い土地に水が溜まってできた池。○魚鼈ぎょへつ＝魚とスッポン。○斧斤ふきん＝おの。まさかり。

(大意) 孟子は言う、「農繁期を避けて人民を徴用するようになれば、穀物は食べても食べきれないほど多く取れるようになるでしょう。また、目の細かい網を沼や池に入れて小魚まで取り尽くすような事を禁止すれば、魚やスッポンの類は食べても食べきれないほど多く取れるようになるでしょう。木を切る時は、その適した時期に切るようにして乱伐を禁止すれば、材木は使っても使い切れないほど多く手に入るようになるでしょう。穀物や魚、スッポンの類が食べても食べきれないほど多く取れ、材木が有り余るようになることは、人民の生活を安定させ、死者を手厚く弔うことができるようにさせ、満足した日常生活を送ることができるようにさせるものです。人民が日常生活に満足することができるようにすることが王道の始めなのです。」

孟子曰はく、「農時を違えずんば穀食ふに勝ふべからざるなり。數罟洿池に入らずんば、魚鼈食ふに勝ふべからざるなり。斧斤時を以て山林に入らば、材木用ゑるに勝ふべからざるなり。穀と魚鼈食らふに勝ふるべからず、材木用ふるに勝ふるべからずは、是れ民をして生を養ひ死を喪じて憾み無からしむるなり。生を養ひ死を喪じて憾み無きは王道の始めなり。」